

マッカラーズの短編小説における少年少女の像

中岡尚美*

The image of the boys and girls in the short stories of Carson McCullers

Naomi NAKAOKA*

Six out of Carson McCullers' twenty short stories focus on "love and loneliness" among adolescent boys and girls. It is often said that teenagers have a lot of worries and troubles in their hearts and that they are hard to deal with. It is the same with the boys and the girls in Carson McCullers' novels and the short stories. This paper introduces these six stories and discusses how the heroes and heroines deal with their troubles. It is hoped that this will be helpful in coping with the students in general.

はじめに

アメリカ南部ジョージア州コロンバスに生まれた女性作家カーソン・マッカラーズ(Carson McCullers, 1917～1967)は病に苦しんだ50年の生涯に5つの長編小説、2つの戯曲、20の短編小説そしていくつかのノンフィクション、子供の詩などを書いた¹。そして、その作品全体を通じて流れる大きなテーマは「人間の愛と孤独」である。

昨年紀要第40号の中で、著者はその中の"The Member of the Wedding"を取り上げ、その主人公の12才の少女Frankie Addamsの孤独と、そこから生じる不安、恐れ等に焦点を当ててみた。また彼女に作者Carson McCullersがどのように反映されているかを考察した。

また、彼女の最初の長編小説であり、好評であった"The Heart is a Lonely Hunter"にも作者の分身を思わせる14才の少女が登場し、思春期の少女の不安定な心、愛を求める心を描きだしている。

そして、20の短編小説のうち、6つの作品が同じように少年期から思春期にかけての時期に、何らかの葛藤を抱えていたり、不安な状況にある少年少女を主人公にしたものである。McDowellも次のように述べている："While the

six stories vary considerably in form and quality, McCullers analyzes in each the situation of a child caught in a difficult position and reacting to it with bewilderment and frustration."²

(6つの物語は形と質がかなり様々だが、困難な立場に捕らわれ、当惑し、苛立ちながらそれに対処している子供の状況をマッカラーズは分析している。)

著者は、短編であるということもあって、まず全訳を試みた。そうすることで内容はもちろんのこと、それぞれの作品の形式上の違い、思春期の子供であるが故の言葉遣いの違い、更には少年と少女の感性の違いなどをはっきりと意識することが出来たように思う。その詳細は各作品の解説で述べたいと思う。

本稿では書かれた順(年代がはっきりわからないものもあるが)に、その6つの作品を紹介し、主人公の少年少女がどのように自分たちの不安定な心や苦しみに立ち向かいそれを乗り越えようとしているかに焦点をあててみたい。そして、時代は異なるが、今の子どもたちを見つめる参考にしたい。

1. "Sucker"

1.1 あらすじ

僕(Pete)は16才、そして4才下の従弟のSuckerと部屋を共有している。Suckerは赤ん坊の時両親が難破事故で亡くなったので僕の家を引き取り、以来兄弟同様に育ってい

*一般科目(英語)

平成11年8月30日 受理

る。彼の本名は Richard というのだが、僕が言うことすること何でも信じ込んでしまうので、Sucker (お人好し) とずっと呼んでいた。何度かつがれても、僕を信じる—それが Sucker の僕に対するいつもの態度だった。

ところが僕が Maybelle という女の子に熱を上げ始めた頃から、二人の関係が変っていった。Maybelle は高校の1つ先輩で、僕は彼女の気を引こうと色々なことをしたが、僕を無視したり、恥をかかせるような態度をとったりすることもあった。それでも僕は一日中彼女のことを考え、夜も眠れないほどだった。そんな時 Sucker が話しかけてくると、僕は彼にひどい言葉を投げつけたり、意地悪をした。ちょうど Maybelle が僕にとるのと同じ態度をとったのだ。

その後、Maybelle の僕に対する態度が変わってきて、彼女と良い関係になった。そうすると僕の Sucker に対する気持ちも変わり、彼が「僕のことを本当の弟みたいに好きなんだね。」と言ったときも Sucker のことが本当に愛おしく感じられた。それまでの自分の彼への態度や彼の日頃の行動を考えると、彼は本当に孤独な子供だったように思えた。これまでの埋め合わせをするかのように、彼と長い時間話をしたりした。そうすると、これまでの彼の臆病な表情も消え、生き生きとした顔になった。

1ヶ月半、Maybelle とも、Sucker ともうまくいっていたが、突然 Maybelle が僕を無視して、他の男の子と付き合い始めた。そのことが気になり始めると、最初は Sucker のことを忘れ、次には彼が気に障るようになり始めた。彼女を追いかけるのと反比例するように、Sucker を無視し、乱暴な言葉を吐きかけた。Maybelle との関係が完全に終わりになった数日後、僕と Sucker との間に決定的な瞬間が訪れた。「どうして今までのように仲良くできないの？」と尋ねた彼に後から思い出せばこの上もなくひどい言葉を浴びせたのだ。自分を抑えることができず口から出るまま無茶苦茶を言った。その時 Sucker は厳しい表情で何も言わず拳を握り、僕を見つめていた。

12才の子供にひどいことをした後悔した僕は謝る機会を求めたが、以来 Sucker はあの時の厳しい、半分あざ笑うような表情で僕を見るだけで、口もきかない。彼は近所の仲間とふざけることもあるが、ほとんど一人であることが多い。僕は勉強しなければいけないのだが、彼と一緒に部屋では勉強できず、町をブラブラしている。もう一度 Sucker と元の関係に戻りたいがどうしようもない。Sucker の目つきには出来ることなら僕を殺したいという表情が感じられる。

1.2 解説

この作品は1933年、作者がまだ16才の時に書かれたものである。子供の頃から、弟や妹たちを役者に仕立てた劇を書いてはいたが、15才までの彼女は作家になることなど夢にも思わず、ピアノに熱心に取り組んでいた。し

かし、病気になったことをきっかけに作家を志すようになった。この作品を書く以前にも、小説を書いてはいたが、この 'Sucker' は、"Carson's first short story, or at least the one she took enough pride in to show to her parents,"³ (最初の短編小説というより少なくとも彼女が誇りをもって両親に見せた作品) であった。

この作品は、語り手である「僕」が女の子に恋をし、それに破れたがために、弟同然の Sucker との暖かい絆を失い、その後悔の念を述べたものである。作品の早い段階に次のような言葉がある。"If a person admires you a lot you despise him and don't care — and it is the person who doesn't notice you that you are apt to admire."⁴ (もしある人があなたに憧れを抱いたら、あなたはその人を軽蔑し、気にも留めない。逆に、あなたが憧れを抱きそうになるのはあなたのことを気にも留めてくれない人である。) 「僕」と Sucker、 「僕」と Maybelle との関係から「僕」が学んだことだ。

このことは、後に Carson の作品の根本的な主題となるものだと V.S. Carr は書いている。確かに代表的作品の "The Heart is a Lonely Hunter" では、主人公の Singer の心は精神薄弱者の Antonapoulos にのみ向かい、相手は Singer に対して何ら愛情を抱いていない。また、ひたすら Singer に愛を求めようとする Mick, Jake などに Singer は心を開かない。いわゆる「報われない愛」をテーマとしている。

決定的なことが起こる以前の Sucker の「僕」に対する姿勢は、いじらしいほど従順で、無邪気である。「僕」が友達を連れてくれば、黙って部屋を明け渡し、騙され続けてもひたすら信じる—。本当の兄弟なら喧嘩の一つでもして自分を主張するだろう。12才の少年が、育ててもらっているという負い目を感じているのだろうか。孤独感から逃れるための術として身につけたものなのだろうか。私は Sucker が心から「僕」を信頼し、尊敬しているからだと思いたい。

Maybelle と「僕」との関係がうまくいくようになった時、「僕」は Sucker のこれまでの孤独が理解できるようになった。"I guess you understand people better when you are happy than when something is worrying you."(p.4) (何かで悩んでいるときよりも幸せなときの方が他人のことをよく理解できると思う。) と気付いたのだ。"It seemed to me that I did like him more than anybody else I knew"(p.4) (誰よりも彼が好きに思えた。) と感じた時、率直である。

Maybelle に拒絶された後はまさしく逆で、自分の欲求不満を Sucker につける。"No you don't know when you're not wanted. You're are too dumb. Just like your name — a dumb Sucker."(p.8) (お前は嫌がられてるのがわからないのか。お前は本当に間抜けだよ。名前のようにね—間抜けのお人好しくん。) 純真な少年の心を徹底的に傷つけるひどい言葉を投げつけている。その時の心のままに言葉を発して

しまう、少年の短絡さがそのままである。

「僕」は Sucker との関係をもどくように修復できるだろうか。一度口からひどい言葉を発し、相手を傷つけたとき、殺したいほど憎む気持ちを抱かせたとき、いったいどうすればいいのだろうか。「僕」はできることは何もないと言っているのだが。

2. Breath from the Sky

2. 1 あらすじ

16才(?)の少女 Constance は結核を患い療養中である。夏の盛りのその日、車椅子で初めて戸外に出て微睡んでいた。眠りから覚めた朦朧とした頭で、看護婦に尋ねた最初の言葉は「お母さんはどこ？」だった。

もうすぐマウンテンハイツの療養所へ行く予定になっている彼女には、その看護婦の体つきから言葉遣い、何もかもが不快にさせる要素で、イライラしていた。病室の壁、床板が彼女を押しつぶすようであったが、青空の下で彼女は一時不安を忘れていた。

そこへ水着を買いに出かけていた母(Mrs. Lane)と弟(Howard)、妹(Mick)が帰ってきたが、犬と元気に戯れる妹に彼女は嫉妬を覚えた。更に自分から兄弟たちを遠ざけようとし、また彼女が戸外へ出たことを咎めている様子の母を見て、疎外感を覚えた。話をするうちにもひどい咳に襲われるが、何とか母と言葉をつなごうとする。そして、何度も「お母さん、」という言葉繰り返す。

母が担当医と連絡を取って、明後日に療養所へ行く話をした時、彼女は呼吸が速くなり、息が詰まり、泣きそうだった。お風呂に長い間入っていないせいもある、自分が汚いように思え、妹たちと泳ぎに行きたいと言うと、母は怒って許さなかった。また、母に髪を切ってもらった時、水着姿でやって来た妹の健康な身体にまぶしさを覚えたり、切り落とした髪の毛を犬の枕にしたいという妹に「その汚らしいもの」を触らないよう怒ったり、自分が家族の他のものとは切り離されているという思いを強く感じていた。

妹たちが泳ぎに行き、母と二人きりになった時、母はあえて目をそらしたり他のことをして、彼女と話をしようとしなない。たまたまなくなって Constance は「私、一人でそこへ行くの？」とずっと気になっていたことを尋ねた。母は当たり前のようにもちろんだと答えた。その質問をもう一度したくて尋ねると、「私があなたと一緒に行くのよ。落ち着くまで2, 3日滞在するわ。」と答えた母の目は不思議な落ち着きがあった。さらに彼女は「お母さん、」と言ったが、その続きの言葉は咳の発作でとぎれた。発作が治まった後、彼女は自分の弱さを感じ、再び力がでるのだろうか心配した。

その時も母は顔を背け、空を見ていた。そしてクラブのパーティーへと出かけていった。去っていく母の背中が少

し震えるのと、動き出した車の中で緊張した母の白い顔が見えたような気がし、彼女の頬には熱い涙が流れ落ちた。

2. 2 解説

この作品は、作者が作家になろうと決意して、ニューヨーク大学の創作クラスにいたとき(1935年)か、その翌年肺結核と診断されて家で療養していたときに書かれたものだと思われる。内容から判断して、後者が妥当かとも思われるが、実は作者は15才の時、リューマチ熱にかかり、他の町のサナトリウムで数週間療養した経験をもっているため、それを元にしたとも考えられる。

この作品のテーマは、死を意識した繊細な少女の疎外感と共に、母と娘との関係だと考えられる。タイトルの「空からの息」とは、療養中初めて戸外に出た Constance にとっては青空が「生」の象徴であり、青空の下で大きく息を吸い込むことで自分を浄化したいという願望を表す。"Out again. Under the blue sky. After breathing the yellow walls of her room for so many weeks in stingy hot breaths. . . Blue sky. Cool blueness that could be sucked in until she was drenched in its color."(p.28) (再び外に出た。青空の下に。何週間も病室の黄色い壁に囲まれて、あえぐような熱っぽい息で呼吸した後だった。今青空の下にいる！その色に染まってしまうまで、涼しげな青い色を吸い込みたい。)という描写は、次のような彼女の思いを表しているのだ；"she longs to be washed by the blue lake and to suck the blue sky into herself in order to make the color a part of her, thereby enlivening the dull gray of her existence. She longs also for the freshness of the sky, in order to escape the contamination she associates with her illness."⁵ (彼女は青を自分の一部にし、そうすることで嫌な灰色の自分の存在に活力を与えるために、青い湖に身体を浸したいとか青空を吸い込みたいと切望する。彼女はまた自分の病とつながる汚れから逃れるために、空の新鮮さを切望する。) 気持ちが落ち着いているときの Constance にとっては青空は涼しげであるのだが、気分が重いとき、例えば母親が外出しようとしているときに見る空は"~looked at the sky that was a burning, fevered blue."(p.30) (燃えるような熱を持ったような青さ)に感じられた。

McDowell の評論の中に "The child is neither one who rejoices to see the gates of heaven opening nor one who blesses the family from whom she is departing."⁶ (その子供は天国の門が開かれているのを見て喜んでいるのでもなければ、自分が離ればなれになろうとしている家族を祝福しているのではない。) という文がある。「空からの息」という言葉からだと、キリスト教社会ではこのような見方もあるであろうが、私の考えでは Constance は純粋に死を恐れ、生に憧れているのだ。また、家族を祝福するどころか、健康で無邪気な妹を妬ましく思ったりする。

Constance が死の恐怖から逃れるために、不器用なやり

方ながら一生懸命母親の愛情を求めようとしているのに、母親の方は無関心で冷淡な態度をとる。そのことが彼女の孤独感をいっそう強めている。独りぼっちで療養所へ送られ、もう戻って来ることがないまま一人で死を迎えるのではないかと。咳が出る中、ひたすら母と言葉をつなごうとしたり、自分の汚れを拭い去ろうとするかのように髪を切ってもらおう Constance の様子は痛ましさを感じるし、逆に母親の素っ気なさは冷徹にも思える。しかし作品の最後で、母の肩が微かに震えるのや、母の顔が緊張し、青白いのを見たとき、母親の本当の気持ちがわかったようで、Constance だけでなく、読んでいる者も心が落ち着く思いがする。しかし、母親が率直に自分の悲しみや同情を表していたら、Constance の孤独感は癒されていたのではないだろうか。

3. Wunderkind

3. 1 あらすじ

15才の Frances は冬のある日の放課後、いつものように Bilderbach 先生のところへピアノのレッスンに来た。スタジオで他の生徒が練習しているのを聴きながら、ここ数ヶ月自分を悩ましている不安のことを思っていた。一震える手と傷ついた指先。「上手な練習」という暗示の言葉。「この頃頑張っているか？」というヴァイオリニストの Lafkowitz 先生の質問に、自分でも理由がわからないけどうまく弾けないと答えたときの重い気持ち。

待っているとき、雑誌に載っていた Heime の写真を見た。彼も15才のヴァイオリニストで、以前招かれて一緒に演奏したことがあった。その写真を見ていると、泣き出したい嫌な気分になったり、練習しすぎた日の夜眠りについたときに見る夢のような感情が襲ったりした。その夢とは - Wunderkind, wunderkind (神童) という言葉が彼女の耳元でうなり、次にささやき声になる。ぐるぐる回り、ゆがんで大きくなり、そして形のはっきりしない顔と共に。Bilderbach 先生、Bilderbach 夫人、Heime、Lafkowitz 先生の顔と共に。

Wunderkind とは、彼女が12才のとき初めて Bilderbach 先生のところへピアノを習いに来たときから、先生が彼女を呼ぶ呼び方だった。「ハンガリー狂詩曲第2番」を暗譜で弾いたときから。写真に載っている Heime は4才からヴァイオリンを始め、当時から彼女と共に Wunderkind と呼ばれていた。コンサートで競演したとき、世間は Heime を賞賛し、彼女は薄っぺらな演奏だとか、感情に欠けていたなどと手厳しく批判された。彼女はそれを選曲のせいにした。

その後、バッハの「幻想曲とフーガ」を弾いたときも自分では上手く弾いたつもりだったが、先生を失望させ、また例の夢を見たものだった。練習に練習を重ねても、心の

中で自分がイメージするようには指が旋律を奏でてくれない。Wunderkind と呼ばれていた自分が平凡な弾き方しか出来ないことにずっと苛立ちを感じていた。

彼女は毎週2回 Bilderbach 先生のところへレッスンに通っていた。先生夫妻には子供がなく、彼女は夕食をごちそうになったり、時には泊まったりして可愛がってもらっていた。中学の卒業式の時にはドレスも買ってもらった。そんな先生の顔に失望の表情を浮かべさせるような演奏しかできない自分にいったい何が起こったのか。

その日のレッスンは、この数ヶ月のスランプを忘れ、以前の彼女の力を取り戻すために、昔彼女が初めて弾いた「ベートーベンのソナタ」だった。技術的には思い通りに弾けるはずのものであり、意識するのは曲の感じだけだと言われた。途中演奏を止めて注意した先生に、最後まで一気に弾かせてくれるよう頼み、通して弾いた。が、先生の口からでたのは、「だめだ」という言葉だった。彼は、更に初心に戻って「調子のいい鍛冶屋」を弾くように言った。そのせかす声を聞き、姿を見ていると、彼女は心臓が止まったように感じ、涙があふれ「もう弾けません。」と言う言葉を残して先生の家を飛び出した。

3. 2 解説

McCullers の作品の中で最初に出版されたこの作品は、これまでのものより簡潔に、力強い表現をしているということで、好評である。特に、かつて作者自身が打ち込んでいた音楽-ピアノ-を材料にして、15才の少女の内面を描き出しているのが、主人公の Frances は作者自身であると述べる評論家もいる。

"The story builds quickly to a climax and almost immediately ends."⁷ (物語は急速にクライマックスに達し、すぐに終わる。)とあるように、場面は午後の遅い時間から夕方までのほんの数時間で、実際のピアノのレッスンと、特に待ち時間に回想したことを通して、Frances の苦悩が語られている。短時間という設定のため、彼女の葛藤がまざまざと伝わってくるようである。

かつては「神童」と呼ばれて誇りも持ち、自分の全てであった音楽が、数ヶ月前から自分を苦しめる存在になっている理由を探ろうとする Frances: "What had begun to happen to her four months ago? The notes began springing out with a glib, dead intonation. Adolescence, she thought. Some kids played with promise - and worked and worked until, like her, the least little thing would start them crying, and worn out with trying to get the thing across - the longing thing they felt - something queer began to happen - But not she!" (p. 66) (4ヶ月前彼女に何が起こったというのだろう。旋律は平坦な抑揚で飛び出し始めた。思春期だわ、と彼女は思った。何人かの子どもたちは将来性を見込んで弾いた - そしてどんどん練習し、ついには彼女のようにくだらない些細なことで

泣き始め、そのことを理解しようとして疲れ果て一何かを切望し一何か奇妙なことが起こり始めるのだ一しかし自分とは違う！)。彼女はその理由を思春期のせいにする。煽てられて無邪気に弾いていた子供時代とは違うのだという心の成長が彼女にあったのだ。

最後にもっとも初歩的な曲を弾くように言われたとき彼女が弾けないと言ったのは、決して力がないということではなく、子供時代との、そして音楽との、更に先生との訣別の言葉だったのだ。McDowell は次のように書いている； "Frances's abandoning of her music is not an impulsive yielding to discouragement, but rather an act of courage, because it represents her acknowledgement that a part of herself has died."⁸ (Frances が音楽を捨てたのは衝動的に失望に屈したのではなくて、むしろ勇気ある行動だった。なぜなら、それは彼女が自分の一部分が消滅したということをも認めたことを表すからだ)。大人になるためには子供時代の大切なものを失ってしまうこともあるというのはよくあることである。

最後に泣きながら先生の家を飛び出し、方向すら間違える Frances の様子には哀れさを感じるが、McDowell は "The ending may suggest Frances's maturing — her realistic judgment of her ability and her facing of herself as a human being who struggles and still fails."⁹ (結末は Frances が成熟したことを暗示している一彼女が自分の能力を現実的に判断し、苦しみながらも失敗するという一人の人間としての自分の姿に直面している。) と好意的な解釈をしている。更に Carr は "Bewildered, she turned in the wrong direction in her simple route home. Yet the young woman had faced her impasse and recognized it, and now there was hope that she could collect herself and move forward in a new and more purposeful direction."¹⁰ (うろたえて、彼女は単純な帰り道を間違った方向に曲がる。しかし、この少女は自分が袋小路にはまりこんだことに気づき、今や自分を立て直して、新しいより目標のある方向に向かうという希望が生まれた。) と、新しい希望へとつなげている。著者はこの Carr のような読みは出来なかった。

また、この作品はふんだんに音楽用語、曲名を用いることによって、Frances の気持を反映している。登場する作曲家、作品は作者自身が音楽に打ち込んでいたとき慣れ親しんだものである。

また、Frances が師の Mr. Bilderbach と別れる心の痛みは、作者が自分のピアノの師 Mrs. Tucker との別れの際に感じたものである。¹¹

4. Like That

4. 1 あらすじ

私は13才の女の子で、18才の姉(Sis)と17才の兄(Dan)がいる。「あのこと」が起こるまでは私と姉は本当

に仲の良い姉妹だった。姉は頭が良く読書家で、行動も控えめで、私の方が年上みたいに服装のことなどを忠告することもあった。その姉に去年の夏、Tuck というボーイフレンドができ、我が家を訪ねてくるようになった。

今年の夏、姉は毎晩のように Tuck とデートをした。私たちは部屋を共有していたが、姉が夜遅く帰ってくると、私は目が覚め、二人で長時間おしゃべりした。姉は Tuck とのことについて何でも話してくれ、本当に彼に夢中だということを感じさせた。

しかし、ある夜「あのこと」が起こり、以来私と姉との関係が少し変わった。その夜ベッドに入っていたら、車の音で目が覚め、Tuck の声、姉の乱暴な足音とドアを閉める音、出迎える母の質問と姉の鋭い答、そして部屋に入ってきた姉の速い息づかい、泣き声が聞こえた。Tuck と喧嘩をしたように思え、慰めるつもりでいつものように姉に身体をすり寄せると、体中が震えており、更に甲高い声で泣いた。起き上がって窓の外を見ると、Tuck の車がずっと家の前に止まっていて、そのことも姉は承知しているようだった。

翌日、姉は顔色も機嫌も悪く、ベッドに横になって本を読んでいる格好だけして、何かの音に耳をそばだてている様子だった。その時姉は私に5年前の喧嘩のことを思い出させた。一叔母が亡くなったのと時期を同じくして姉に初潮があり、姉に対して嫌な感情を持った。気分が塞いでいる姉に向かって、「私なら絶対そんなふうにもみともならない。」などとひどい言葉を浴びせてしまったときのことを一。

その日も Tuck はやってきたが、二人は互いの顔も見ず、何かを恐れている感じだった。父が姉に Tuck とのことを尋ねたときも、彼女は取り乱した感じだった。私は二人の間に何があったのか知りたかった。喧嘩なのか、彼が大学へ行ってしまふのが悲しいからなのか。私にはどちらでもないように思えたが、尋ねることもできず、その夜は初めて孤独を感じた。

夏が終わり、学校が始まったが、昨年の秋とは全く違う毎日だった。姉はぼんやり過ごすことが多く、大人のような顔で私を見たりする。今までのように仲良く一緒に何かをすることもない。私は時々友人とスポーツを楽しんでいるが、孤独を感じている。

私は姉のようになりたくない。大人になるということがあのようなことなら、私は大人になりたくない。

4. 2 解説

この作品も習作時代の1936年に書かれたものだとされている。本稿の1で紹介した"Sucker"と同じく1人称で書かれているが、"Sucker"が兄弟(?)の親密な関係とその喪失を描いているのに対して、この作品は、13才の妹が18才の姉の変化を述べることによって、姉妹間におけ

る同じ状況を描いている。

まず、タイトルの "Like That" だが、著者は「あんなこと」だと解釈しながら読み進んだ。作品中には2回だけこの表現が出てくる。"It looks terrible. I wouldn't ever ever be like that. I shows and everything."(p.54) (みっともなく見えるわ。私なら絶対、絶対あんなふうにはならないわ。目立つし、いろいろ。) 姉に初潮が訪れたとき、こう言って姉を泣かせている。また、作品の最後に "You see I'd never be like Sis is now. I wouldn't. Anybody could know that if they knew me. I just wouldn't, that's all. I don't want to grow up - if it's like that."(p.57) (そう、私は絶対に今の Sis のようにはなりたくない。絶対に。私を知ってる人なら誰でもわかってくれるはず。私は絶対ならない。ただそれだけ。私は大人になんかなりたくない。もし大人になるということがあんなふうになることなら。) とある。自分と対等に思われた姉の変化を目の当たりにして、成長することへの不安と拒絶をはっきり述べている。浅井明美氏は McCullers の伝記の翻訳の中でこの作品の日本語題名を「あんなのはいや」としているが、少女の潔癖感と拒絶が表れたピッタリのタイトルだと思う。

少女にとって憧れと誇りの対象であった、頭のいい冷静な姉に訪れた突然の変化は大きな戸惑いであった。初潮のことを知ったときはちょうど叔母が亡くなった直後で、死を連想し、死への恐怖と生理的な嫌悪感が大人になることを拒ませたのだ。また、ある夜、ボーイフレンドとのデートから帰ったとき、体中を震わせ泣きじゃくる姉のただならぬ様子に、彼女は姉が自分から遠く離れ、一気に大人になってしまったと感じたのだ。著者が想像するにそれは性的体験だと思うが、少女は本能的にそのことを感じ、姉に対して不信感を抱くと共に、自分が取り残されたという疎外感も感じたようだ。

"I'm hardboiled as the next person. I can get along by myself if Sis or anybody else wants to. I'm glad I'm thirteen. I get lonesome - sure - but I don't care."(p.56) (私は誰にも劣らず非情な人間だ。Sis や他の人が仲良くしたいと思ったとしても私は一人でやっていける。自分がまだ13才なのが嬉しい。孤独になったけど、私は気にしない。) 孤独であるけど、大人になるよりはその方がいいと、強く言いきるところに少女の潔癖さがあらわれ、小気味良い。

5. Correspondence

5.1 あらすじ

<第一の手紙>

コネティカット州に住む高校1年生の Henky は学校の掲示板で見つけたブラジルの Manoel に文通しようと手紙を出す。南米に興味があり、黒い瞳、褐色の肌、黒い髪の相手がリオの海岸を歩いているところを勝手に想像してい

る。文通を続け、友人になるためには互いのことを知らねばならないと、彼女は自分の将来のこと、神や人生についてというような深刻なことも書く。また、相手と会ったときのために、スペイン語を勉強していることや、夏休みには互いを訪問し合ったり留学することを考えているとか、自分とあなたは似たところがあるような気がするというようなことまでも書いている。

<第二の手紙>

3週間経過しても返事がこないが、外国からの郵便は遅れることが多いし、特に戦争などが原因かもしれないと解釈している。相手が自分の想像通りの姿形かを知るために写真を交換することも提案する。また、魂の再生に関する本を読んだ感想を述べ、相手の意見を求める。11月の今、自分のいるところは秋だが、ブラジルでは春であることにも感動している。すぐに返事がくるものと期待している。

<第三の手紙>

2ヶ月が過ぎ、学校の他の友達はずでに文通相手から手紙を受け取っているのに、Henky にはまだ返事が来ない。これまでの2通を受け取っていないか、それとも2通とも行方不明になったのかと想像している。また、自分の書いた英語の手紙を訳してくれる人がいないとか、病気で入院したとか、引っ越したとか様々な理由を想像する。便りがなくて腹を立ててはいないし、文通を続けたいので事情を説明するよう求める。

<第四の手紙>

これまで誠実に3通の手紙を出し、返事を期待し、疑わしいことも好意的に解釈していたが、間違いであったことに気付く。彼は文通するつもりがないのになぜリストに自分の名前を載せてもらったのか、そのとき今のような状況が分かっていたら、自分は他の人を文通相手として選んでいただろうとはっきり書く。

5.2 解説

あらすじは要約の形にしたが、これは McCullers の作品の中で唯一書簡体で書かれたものである。日付を追った4通の手紙に、一途に思いこみがちな少女の期待、不安、気持ちの変化が表現されている。

最初の手紙では、海外文通そのものと相手に一方的な期待を抱き、突拍子もないことを思いつく Henky に子供らしい純真さを感じる。2通目、3通目でも返事をくれない相手に腹を立てず、好意的に理由を推測しているところはいじらしいほどである。

ただ、彼女は3通目まで同じ気持ちで書いているわけではない、ということが使用している言葉、表現で判断できる。例えば、書き出し(salutation)と結辞(complimentary close)署名(signature)を見ると、1通目は、"Dear Manoel"で始まり、"Your affectionate friend, Henky Evans"で終わっている。2通目は、"Dear Manoel"そして"Affectionately Yours, Henky

Evans"となり、friendを使っていないところにやや気持ち
が萎えた感がある。更に3通目は"Dear Manoel Garcia"とフル
ネームで書き出し、"Sincerely yours, Henrietta Evans"と
フォーマルな結辞及び自分の名前もニックネームではなく、
正式な名前になっている。腹を立ててはいないと言っても、
正直に気持ちが表れているところがかわいい。

もちろん、4通目は失望感と共にはっきりと相手の不実
を咎めているので、"Dear Mr. Garcia"と敬称を付けて始め、
"Yrs. truly, Miss Henrietta Hill Evans"と極めて正式な形で
終えている。乱暴な怒りの言葉を用いないで、丁寧に皮肉
っぽく相手を非難しているのは、14才の少女とは思えない。
特に追伸で、"I cannot waste any more of my valuable time
writing to you"(p.124) (あなたに手紙を書くことでこれ以上
私の大切な時間を無駄にはできません。)と厳しく書いて
いる。

この作品は単純で平易な手紙の形式ではあるが、やはり
作者のテーマである「報われない愛」を表現した作品であ
ると感じながら読んだ。愛を求めるが、拒絶され傷つきな
がら子供時代から思春期そして大人へと成長していく過程
を humorous に縮図の形で表したのがこの作品であろう。

McDowell が次のようにも分析している。"The themes
developed in Henky's letters are those encountered elsewhere in
McCullers's fiction: the essential narcissism of human beings,
the longing for reciprocity in any expression of interest or
affection, and the ironic combination of gain and loss as one
grows up."¹² (Henkyの手紙に展開されているテーマは
McCullersの小説のあちこちで出くわすものである。それは、
人間の本質的な自己愛、興味や愛情のあらゆる表現に
おいてお互い報われたいと切望する気持、そして人が成長
する時皮肉にも獲得と喪失を同時に経験することだ。) 確
かに Henkyの手紙は自己中心的でもある。

最後に、この作品は作者がニューヨークの夫の元を離れ
て "The Ballad of the Sad Cafe" を執筆しているとき、それを
中断して書いたものである。夫の誠実さを期待していたの
に、彼から便りがなく不安から書いたものである
ことは疑いないと Carrは伝記の中で述べている。¹³

6. The Haunted Boy

6. 1 あらすじ

4月半ばのある日、学校から帰った Hughはいつものよ
うに母親に呼びかけたが、家の中は静かで、暖炉に火もな
く、絨毯の赤い色だけが輝き、異様な感じだった。彼は
「あの時」を思い出してぞっとした。

恐怖感を振り払うように、同行した2年先輩の Johnを
台所に連れていき母親が作ったパイを勧めた。用があると
いう彼をとにかく引き留めたかった。Hughは誰も居ない
家が怖かったのだ。母が家の中のどこかに居るといこと

を確かめなければ不安だったのだ。

Johnが居る間に母を捜しに2階に行こうと階段を上がり
かけて、再び「あの時」が蘇った。赤い色が目の前に渦巻
き、めまいがして、手すりにしがみついた。

Johnに母親が病気なのかと尋ねられて、Hughは彼にな
ら本当のことが話せると思い、話し始めた。一正確には病
気ではないこと。昨年母親は女性特有の病気に罹り、その
後精神的に不安定になったこと。それで州立の大病院へ入
院したこと。そのことで友達に母親が気が狂っていると言
われ、喧嘩をしたこと。話の内容がだんだんと「あの
時」に近づいた。去年の秋のあの日に。

Johnは帰ろうとしたが、Hughはもっと話をしようと彼
を引き留めた。テレビの話、外国語の話。そして突然庭に
出て、バスケットボールをしたり。いよいよ本当に帰ろう
とする Johnを2階に連れていこうとした。「2階に君の
恐れるものがあるのかい。」と尋ねられたが、Johnにも
「あの時」母がしたことは話せなかった。

Johnが帰った後、Hughは勇気を出して二階に上がって
いった。心臓がドラムのように打ち、深い水の中を歩くよ
うに足を引きずっていた。

思い切って浴室のドアを開けた。「あの時」の光景が浮
かんだ。一母が床に横たわり、切り傷の入った手首は血だ
らけで、そこら中に血が流れていた。しかし「あの時」
ではない、何も起こってない、と気付いたとき、母の寝室
に入り、緊張がほぐれて数カ月ぶりに泣いた。

Hughは「あの時」にも泣かなかった。母が入院したと
きも、父親と二人きりで同じような食事が続いたときも、
母親を病院に見舞ったときも泣かなかった。重苦しさや恐
怖で緊張していた数ヶ月間全然泣かなかった。

Hughが気付かないうちに母親が帰ってきていて、彼の
そばにきたとき、彼はいつそう大きな声で泣いた。母がい
ない間に自分が抱いていた恐怖を話すことはできなかった。
ちょっと買い物に出かけていたと言う母親と、その買って
きた品物を咎めたが、母の悲しげな顔を見て怒りは消え、
愛情があふれてきた。

その日の夕方、父親とじっくり話をする機会があった。
父は母親が本当に元気になってよかったと言い、また、
「あの時」、あのつらい時、Hughが本当に立派だったと
褒めてくれた。大人に対するような言葉遣いで。そして、
夕食の準備をしている母親の姿を見たとき、彼は恐怖心も、
怒りも遠ざかってしまったと感じた。

6. 2 解説

この作品の書かれた年ははっきりわからなかったが、1
952年に "The Ballad of the Sad Cafe" と共に出版されたも
のである。当時、作者は作家としては成功をおさめていた
が、私生活ではその10年前くらいから不遇な状況が続い
ていた。離婚、重病、父の死、自らの自殺未遂、そして一

度離婚した夫との再婚など人生の悲哀をことごとく味わっていた。

タイトルは「取り憑かれた少年」と和訳できるが、1年前、母親の自殺未遂を発見した少年が、そのトラウマから逃れられず、その時の恐怖に取り憑かれている状況と、それを克服する過程を描いたものである。背景には作者自身の心理的不安があると思われる。

母が血を流して倒れているのを発見した1年前の「あの時」のことを、父親とも心を開いて話せない、もちろん友人にも話せない、そのことが Hugh 少年の恐怖を取り除けない原因の一つである。"He had talked with no one about his mother, except his father, and even those intimacies had been rare, oblique."(p.161) (彼は父親を除いて他の誰とも母親のことを話したことはなかった。そして、父子というそんな親しい間柄でも、それも滅多になかったし、ごまかしのようなものだった。) 病む母の代わりに父親が精神的な支えになるべきであったのだ。

また、Hugh がそのことで思い切り泣いていなかったということも原因だろう。"Hugh had not cried all those months.

He had not cried at "the other time", when he found his mother alone in that empty house with blood everywhere... he could not cry all during those long months strained with dullness and want and dread.(pp.166-167) (Hughはこの何ヶ月もずっと泣いていなかった。「あの時」母が誰もいない家の中でそこから中血だらけにして一人で居るのを見つけたときも泣かなかった。重苦しさや欲望と恐怖で緊張していたあの長い数ヶ月の間も泣くことができなかった。) 彼はなぜ泣かなかったのか。10代の少年が自分なりに、「泣かないのが大人の男」と判断していたのだろう。いわゆる「つぶっていた」のだと思う。

作品の最後で、母親に怒りをぶつけると共に、思い切り泣いたことと、父親に自分を認められたことで、彼に取り憑いていた恐怖心は取り除かれた。少年が成長する過程では、傷口にも触れ、家族が本心からぶつかり合うことが必要だったようである。

"This work illustrates the psychic tension of a child torn between pity for — and anger against — a parent and also the tension between his need to appear mature and his need to express his fear."¹⁴ (この作品は親(ここでは母親だが)への哀れみと怒りとの板挟みになった子供の精神的緊張を描くと共に、成熟したように見えなければいけないことと恐怖を表さなければいけないこととの緊張も描いている。) という評もあるように、思春期の子供の心は複雑である。

おわりに

「はじめに」において述べたように、主人公である10代の少女の内面の葛藤を中心に6つの作品を紹介し、

分析した。どの作品も50年以上前に書かれたものであり、少年少女を取り巻く環境は、明らかに現代とは全く異なっている。しかし、子供の心に影響を及ぼす問題は、今と大差がないことが読みとれる。親との関係、兄弟・友人との関係、自分の生き方に関わることなど、今の若者が抱えている悩みそのものである。また、傷つきやすい自分の心を持って余していることも今と全く同じである。

科学技術が発達し、物質的に豊かになった現代でも、そんな少年期の悩みを解決するよりよい方法を見つけ出すことができないばかりか、豊かさゆえの新たな葛藤を子供の心に引き起こし、子供たちは一層苦しんでいるようにも思える。そのような子供に我々大人は何をしてやれるのかを改めて考えてみたい。

評論家の説を裏付ける形で原文を紹介したものもあれば、著者なりの勝手な解釈で和訳をしたものもあることをご了解していただきたい。また、英語表現自体に注目すべき箇所もあつたり、背景的観点(例えば Wunderkind における音楽のような)からアプローチしてみたいものもあつたので、今後研究してみたいと考えている。

注釈

1. 中岡、津山高専紀要、40(1998) p.131
2. Margaret B. McDowell, *Twayne's United States Authors series 354: Carson McCullers*, Twayne Publishers, 1980, p.117
3. Virginia S. Carr, *The Lonely Hunter: A Biography of Carson McCullers*, Carroll and Graf Publishers, 1985, p.34
4. Carson McCullers, *Sucker: Collected Stories of Carson McCullers*, Houghton Mifflin Company, 1987, p.2
以後、作品からの引用はこの版によるものとし、引用箇所の後の括弧内にその頁を記すものとする。
5. 上記2, p.117
6. 上記2, p.117
7. 上記2, p.121
8. 上記2, p.122
9. 上記2, p.122
10. 上記3, p.62
11. 上記1, p.134
12. 上記2, p.124
13. 上記3, p.160
14. 上記2, p.119

その他の参考文献

1. ヴァージニア・カー著 浅井明美訳、孤独な狩人—カーソン・マッカーズ伝、国書刊行会、1998